

東京2020オリンピック競技大会・ 千葉県内開催競技と 千葉県ゆかりの選手の活躍

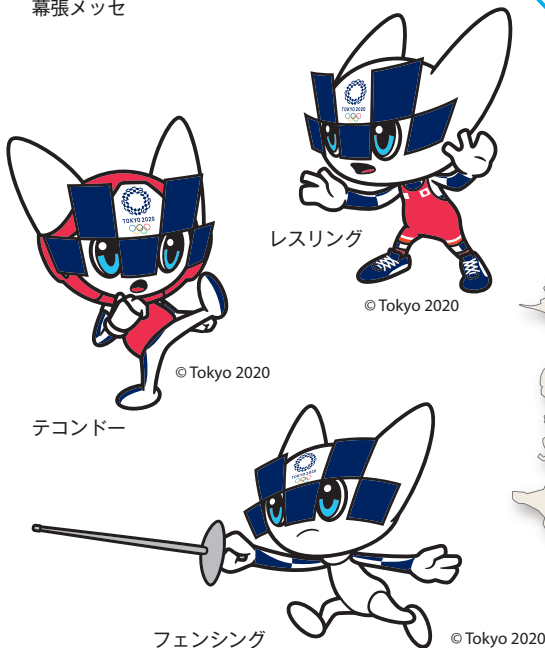
1

千葉県内開催競技

千葉県内では、東京2020オリンピック競技大会において、7月24日から8月7日までの15日間に、幕張メッセ（千葉市）で、フェンシング、テコンドー、レスリングの3競技、釣ヶ崎海岸（一宮町）でオリンピック史上初となるサーフィンが実施された。



幕張メッセ



テコンドー

レスリング

フェンシング

◎フェンシング

幕張メッセ Bホール(国際展示場9～11ホール)
2021年7月24日(土)～8月1日(日)

◎テコンドー

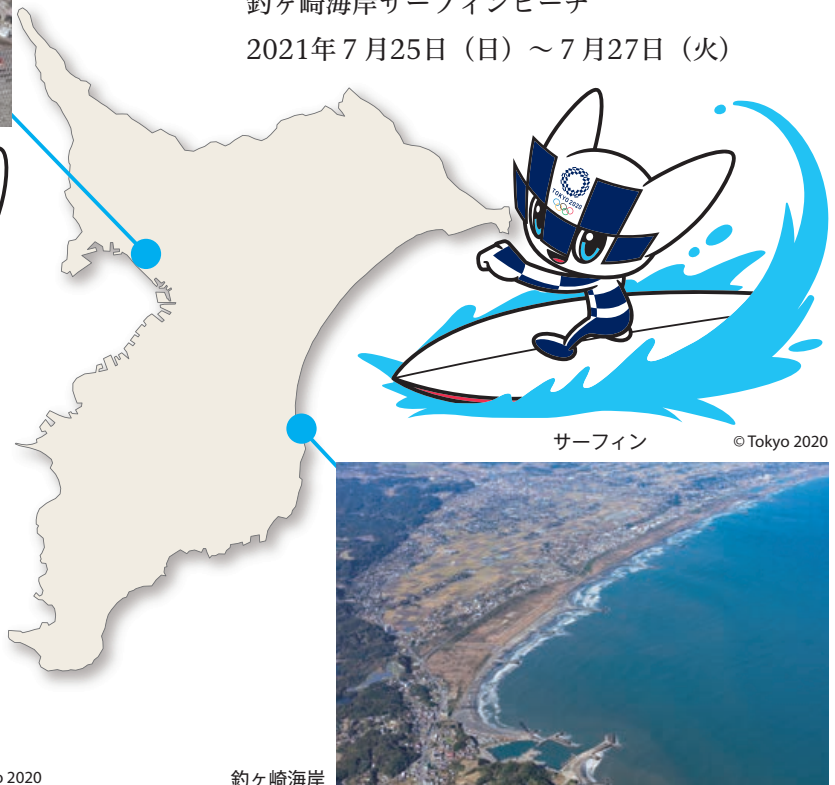
幕張メッセ Aホール(国際展示場1～8ホール)
2021年7月24日(土)～7月27日(火)

◎レスリング

幕張メッセ Aホール(国際展示場1～8ホール)
2021年8月1日(日)～8月7日(土)

◎サーフィン

釣ヶ崎海岸サーフィンビーチ
2021年7月25日(日)～7月27日(火)



サーフィン

釣ヶ崎海岸



男子エペ団体決勝 右が加納選手

© AFLO / アフロ



フェンシング

フェンシングは、7月24日から8月1日までの9日間、幕張メッセBホールで、フルーレ、エペ、サーブルの3種目について、男女それぞれ個人戦と団体戦が実施された。フルーレ、エペ、サーブルの大きな違いは、有効面と呼ばれるポイントを獲得できる範囲にある。フルーレは、頭部と両腕を除いた上半身が有効面であり、攻撃をするには「優先権」が必要となる。エペは全身が有効面で、フルーレと異なり「優先権」の考え方はなく、先に相手を突いた選手の得点となる。サーブルでは、フルーレやエペの「突き」に加えて、「斬り」の攻撃も有効で、頭部と両腕を含む上半身全体が有効面となる。今大会では、日本は女子エペ団体以外の全種目に出場した。

加納虹輝選手、見延和靖選手、山田優選手、宇

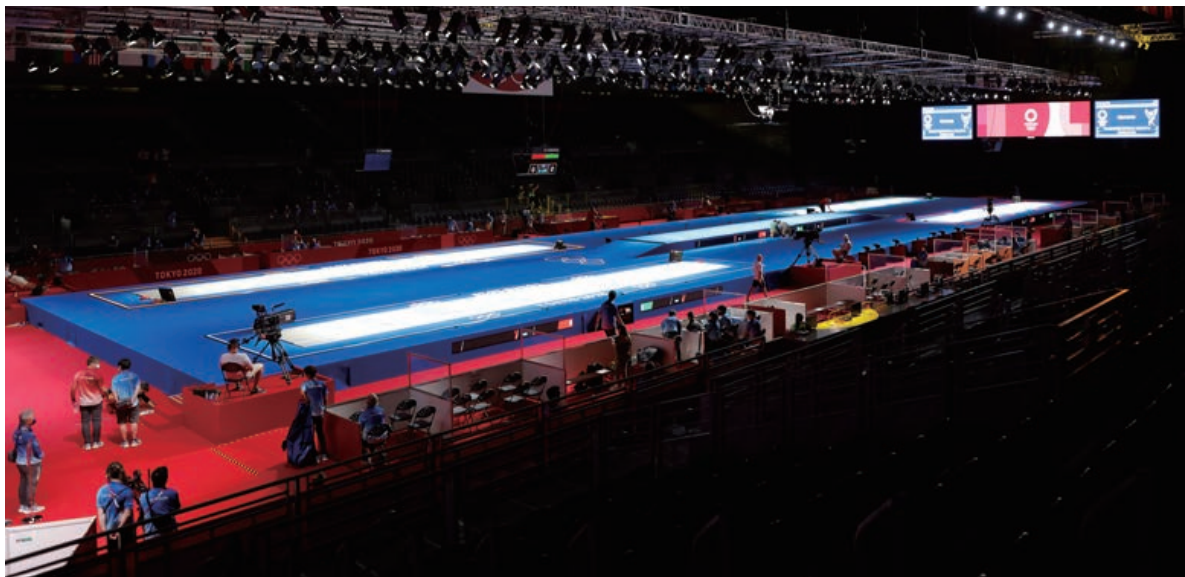
山賢選手が出場した男子エペ団体では、日本は世界ランキング8位で大会に臨み、準々決勝で同1位のフランス、準決勝で同5位の韓国に勝利。決勝では、同2位のロシアオリンピック委員会を破り、日本のオリンピックフェンシング史上初めての金メダルを獲得した。

男子フルーレ団体には、敷根崇裕選手、西藤俊哉選手、松山恭助選手、永野雄大選手が出場し、3位決定戦に臨んだが、世界ランキング1位のアメリカに敗れ、4位入賞となった。また、女子サーブル団体は5位、女子フルーレ団体は6位にそれぞれ入賞した。個人戦では、団体戦にも出場していた男子フルーレの敷根選手が4位入賞、男子エペの山田選手が6位入賞、女子フルーレの上野優佳選手が6位入賞を果たした。

千葉県の学校訪問プロジェクトで講師を務めた女子エペの佐藤希望（のぞみ）選手



© AFLO / アフロ



フェンシング会場

© ロイター / AFLO



千葉県の学校訪問プロジェクトで講師を務めた男子サーブルの徳南堅太選手（左）

© ロイター / アフロ



© アフロスポーツ

男子エペ団体が金メダルを獲得した日本代表選手
左から加納選手、見延選手、宇山選手、山田選手
高校総体で団体競技があるのはフルレだけだが、世界で最も競技人口が多いのはエペ。日本フェンシング協会は、競技人口拡大のためにエペの普及と強化に努め、その成果もあり、東京2020大会で史上初の快挙を成し遂げた。



3位決定戦で戦う女子49kg級の山田選手（左）

© AP / アフロ



テコンドー

テコンドーは、7月24日から7月27日までの4日間、幕張メッセAホールで、男女それぞれ4階級、計8種目が実施された。「足のボクシング」とも呼ばれるテコンドーは、胴体と頭部への蹴り、胴体へのパンチが得点になり、ノックアウトまたは合計得点で競う。パンチによる得点は1点だが、蹴りは種類に応じて2点から5点と得点が高くなるため、選手は蹴りを中心に攻撃を組み立てる。

女子49kg級には2018年ジャカルタ・アジア大会銅メダルの山田美諭選手が登場した。山田選手は父の啓悟さんの道場で3歳から空手を始めたが、兄の勇磨さん（元テコンドー日本代表）の影響で、中学1年生でテコンドーに転向。千葉県の前取材に「華麗な足技はもちろんですが、試合展開が早く観ている方も引き込まれるような競技だと思います」とテ

コンドーの魅力について語った。

山田選手は1回戦終盤に中段蹴りを入れて台湾の選手を逆転し、準々決勝に進出。準々決勝では2017年、2019年の世界選手権46kg級覇者であるシム・ジェヨン選手（韓国）に快勝したが、準決勝で世界ランキング1位のパニパック・ウォンパッタナキット選手（タイ）に敗れた。

続く3位決定戦では2016年のリオデジャネイロ大会の銀メダリスト、ティヤナ・ボグダノヴィッチ選手（セルビア）と対戦。惜しくもメダル獲得はならず、5位入賞となった。

男子68kg級の鈴木リカルド選手、男子58kg級の鈴木セルヒオ選手、女子57kg級の濱田真由選手の3選手は残念ながら初戦敗退となった。



男子68kg級の1回戦で戦う
鈴木リカルド選手

© AP / アフロ

男子58kg級の1回戦で戦う
鈴木セルヒオ選手



© 西村尚己 / アフロスポーツ



女子57kg級の1回戦で戦う濱田選手

© 森田直樹 / アフロスポーツ



テコンドー会場

© 森田直樹 / アフロスポーツ



決勝で勝利し金メダルを獲得した須崎選手
©フォート・キシモト



レスリング

レスリングは、8月1日から8月7日までの7日間、幕張メッセAホールで、男女フリースタイル各6階級と男子グレコローマンスタイル6階級の計18階級が行われた。レスリングの試合は、直径9メートルの円内で行われ、試合時間は1ピリオド3分間で2ピリオドを実施する。フリースタイルでは全身、グレコローマンスタイルでは上半身だけを使って戦い、技を決めるごとに得点が与えられる。

女子62kg級決勝では、川井友香子選手が2019年世界選手権金メダリストのアイスルー・ティニベコワ選手（キルギス）を破り、金メダルを獲得。翌日には2016年リオデジャネイロ大会金メダリストの姉、川井梨紗子選手が女子57kg級でオリンピック2連覇を飾った。同じ夏大会における姉妹での金メダル獲得は日本初であった。

女子50kg級には松戸市出身の須崎優衣選手が登

場。決勝では、開始からわずかに約1分30秒で一気にポイントを重ね、10対0でテクニカルフォール^{▶1}勝ち。全試合で対戦相手に1ポイントも許さず、すべてテクニカルフォール勝ちという圧倒的な強さを見せ、オリンピック女子個人種目で千葉県出身者初の金メダリストとなった。

さらに、女子53kg級に出場した向田真優選手、男子フリースタイル65kg級に出場した乙黒拓斗選手も金メダルを獲得した。

なお、女子76kg級には松戸市在住の皆川博恵選手が出場したが、残念ながら3位決定戦で敗れ、5位入賞となった。

日本は、男子が金、銀、銅を1つずつ、女子が金4つと計7つのメダルを獲得した。

▶1 グレコローマンスタイルでは8点差、フリースタイルは10点差がついた場合、試合終了（テクニカルフォール）となる。



姉妹で金メダルを獲得した
川井友香子(左)・梨紗子(右) 姉妹

©アフロスポーツ



レスリング会場

©UPI /アフロ



金メダルを獲得した向田選手

©アフロ



女子76kg級で金メダルを獲得した
ドイツの選手と準決勝で対戦する皆川選手

©USA TODAY Sports /ロイター/アフロ



男子65kg級で金メダルを
獲得した乙黒選手

©Abaca /アフロ



男子準々決勝での大原選手の演技

提供：共同通信社



サーフィン

7月25日、東京2020大会で初めてオリンピック競技として採用されたサーフィン(ショートボード)^{▶1}が、一宮町の釣ヶ崎海岸サーフィンビーチで開幕した。記念すべきファーストヒートに地元一宮町出身の大原洋人選手^{おおはらひろと}が登場。大原選手がこの組で2位になるなど、日本代表の選手4人はそろって2日目の第3ラウンドに進出した。翌26日、大原選手は第3ラウンド終了間際にエアリバース^{▶2}で逆転。前田マヒナ選手^{まえだ}はこのラウンドで敗退し、9位となった。

7月27日には、台風8号の影響により翌28日に予定されていた3位決定戦と決勝が前倒しされ、準々決勝・準決勝と合わせて1日で実施された。大原選手は準々決勝で2019年の世界チャンピオンであるイタロ・フェヘイラ選手(ブラジル)に惜敗し、5位入賞となった。一方、五十嵐カノア選手^{いがらし}は、準決勝で世界ランキング1位のガブリエウ・メジナ選

手(ブラジル)に逆転勝ちした。決勝では不規則な波を乗り越えたフェヘイラ選手に敗れはしたが、オリンピックでのサーフィン初の銀メダリストとなった。また、女子の都筑有夢路選手^{つづきあむろ}は準決勝でカリッサ・ムーア選手(アメリカ)に敗れたが、3位決定戦を制し、銅メダルを獲得。男女でメダルを獲得したのは日本だけとなった。

釣ヶ崎海岸は、五十嵐選手の父・勉^{つとむ}さんがサーフィンに通ったゆかりの場所で、アメリカで暮らす五十嵐選手も日本に来たときはこの海岸で波に乗っていたという。神奈川県藤沢市出身の都筑選手はより良い練習環境を求め、釣ヶ崎海岸の近くに移り住み、2019年WSL QS6000一宮千葉オープンで優勝した経験を持つ。

- ▶1 サーフボードには6フィート(約183センチ)前後のショートボード、長さ9フィート(約274センチ)以上のロングボードなどがある。
- ▶2 波から飛び出し一回転する大技



男子準決勝での五十嵐選手の演技
決勝に進出し、銀メダルを獲得

©ロイター/アフロ



女子準々決勝での都筑選手の演技
3位決定戦で勝利し、銅メダルを獲得

©KONDO /アフロ



女子第1ラウンドでの前田選手の演技

©ロイター/アフロ



Photo by Tokyo 2020/Uta Mukuo

サーフィン会場



©KONDO /アフロ

2

千葉県ゆかりの選手の活躍

東京2020オリンピック競技大会には、千葉県にゆかりのある数多くの選手が出場し、メダル獲得や入賞を果たすなど、素晴らしい活躍を見せた（千葉県ゆかりの選手の競技結果については資料編p.252参照）。

体操競技——かやかずま萱和磨選手、たにがわわたる谷川航選手、はしもとだいき橋本大輝選手

体操競技の男子団体には、今大会がオリンピック初出場となる萱和磨選手、谷川航選手、橋本大輝選手、きたぞのたける北園丈琉選手が出場し、予選を1位で通過。決勝ではロシアオリンピック委員会の262.500に次ぐ262.397と0.103の僅差で惜敗したが、銀メダルを獲得した。

また、男子個人総合では、橋本選手が同種目最年少の金メダリストとなり、同種目ではロンドン大会（2012年）、リオデジャネイロ大会（2016年）の2大会で金メダルを獲得したうちむらこうへい内村航平選手と合わせ日

本人選手の3連覇となった。さらに種目別では、あん馬で萱選手が銅メダルを獲得した。あん馬での表彰台は、2004年アテネ大会以来4大会ぶりであった。また、鉄棒には橋本選手が出場。決勝出場選手中ただ一人15点台をマークし、男子個人総合に続く2つ目の金メダルを獲得した。鉄棒での金メダル獲得は、ロサンゼルス大会（1984年）以来、37年ぶりの快挙となった。

船橋市出身の萱選手は、小学校時代に体操を始め、市立習志野高校を卒業後、順天堂大学に進み、同じく船橋市出身の谷川選手も小学校時代に本格的に体操を始め、市立船橋高校を経て順天堂大学に進んだ。また橋本選手は、下総町（現在の成田市）出身で、小学校時代に体操を始め、市立船橋高校を経て順天堂大学に進んでいる。なお、男子団体に出場した日本代表4選手の平均年齢は21.5歳で、決勝に進んだ8カ国の中で最も若かった。



男子個人総合で金メダルを獲得した橋本選手

©ロイター/アフロ



銀メダルを獲得した体操競技男子団体の表彰式
左から橋本選手、萱選手、北園選手、谷川選手

©Agencia EFE /アフロ



あん馬の種目別決勝で銅メダルを獲得した萱選手

提供：共同通信社



金メダルを獲得したソフトボール日本代表 前列右から1番目が市口選手、2列目右から3番目が峰選手

©YUTAKA /アフロスポーツ

ソフトボール——^{いちぐち ゆか}市口侑果選手、^{みねゆきよ}峰幸代選手

7月21日に全競技に先駆けて、3大会ぶりにオリンピック競技として採用されたソフトボールが開幕した。予選リーグを2位で通過した日本は決勝でアメリカを破り、金メダルに輝いた。

県にゆかりのある選手では、木更津総合高校出身の市口侑果選手（内野手）と峰幸代選手（捕手）が代表メンバー入りを果たした。市口選手は決勝で二塁手として出場し、峰選手は決勝での出場はなかつ

たが、一次リーグで活躍し、他の試合ではメンバーにアドバイスするなどチームを支えた。

ソフトボールは1996年アトランタ大会で初めて正式種目に採用され、日本は2000年シドニー大会の銀、2004年アテネ大会の銅、2008年北京大会の金に続き、ソフトボールが実施された4大会連続となるメダルを手にした。



©AFLO /アフロ

準決勝に臨むサッカー男子日本代表
前列右から2番目が旗手選手、後列左から
2番目が酒井選手、5番目が中山選手



チリ戦でシュートを打つ菅澤選手（中央9番）

©フォート・キシモト

サッカー男子——^{さかいひろき}酒井宏樹選手、^{なかやまゆうた}中山雄太選手、^{はたてれお}旗手怜央選手

7月22日に開幕したサッカー男子では、日本は全勝でグループリーグを通過し、準々決勝ではPK戦の末ニュージーランドに勝利。準決勝でスペイン、3位決定戦でメキシコに敗れ、53年ぶりのメダル獲得はかなわなかったが、4位入賞を果たした。

県ゆかりの選手としては、酒井宏樹選手（柏市出身）、中山雄太選手（県立柏南高校卒業）、旗手怜央選手（順天堂大学卒業）が代表入り。酒井選手と中山選手はディフェンス陣の一角として準決勝までの失点を合計2点に抑え、旗手選手はグループリーグのフランス戦で1アシストを決めるなど、チームに貢献した。

サッカー女子——^{すがさわゆい}菅澤優衣香選手、^{ひらおちか}平尾知佳選手

サッカー女子では、県にゆかりのある菅澤優衣香選手（千葉市出身）と平尾知佳選手（松戸市出身）が日本代表に選出された。菅澤選手は、兄の影響で



ウエイトリフティング女子59kg級で ©長瀬友哉 /フォート・キシモト
銅メダルを獲得した安藤選手

サッカーを始め、今大会でオリンピック初出場。高身長を生かしたポストプレーやヘディングシュートを強みとし、グループリーグではカナダ戦とチリ戦に出場した。平尾選手は、今大会での出場はなかったが、バックアップメンバーとしてチームを支えた。

チームは、準々決勝で強豪のスウェーデンに敗れ、8位入賞となった。

ウエイトリフティング——^{あんどうみきこ}安藤美希子選手

ウエイトリフティング女子59kg級では、2大会連続でオリンピック代表に選ばれた安藤美希子選手が銅メダルを獲得した。本番1カ月前に右膝にけがを負い、練習を再開できたのは大会1週間前だったが、けがを乗り越えての表彰台となった。安藤選手は白井市出身で、同市初のオリンピックとして2018年度から「しろいふるさと大使」を務めており、東京2020大会でのメダル獲得により同市初のオリンピックメダリストとなった。



3x3バスケットボール男子準々決勝でプレーする保岡選手 © 新華社/アフロ



柔道男子100kg級で戦うウルフ選手 © 築田純/アフロ

3x3バスケットボール——やすおかりゅうと保岡 龍斗選手

今大会から正式種目に追加された3x3バスケットボール男子には、保岡龍斗選手（日本体育大学柏高校卒業）が代表入りした。日本は6位で予選リーグを突破して準々決勝に臨んだが、ラトビアに敗れ6位入賞となった。保岡選手は、2019年に初めて日本代表に選ばれ、今大会では、日本が準々決勝進出を決めた中国戦において計8得点を挙げるなど、チームの勝利に貢献した。

柔道——ウルフアロン選手

柔道では男子100kg級において、東海大学付属浦安高校出身で、了徳寺大学（浦安市）職員のウルフアロン選手がオリンピック初出場で金メダルを獲得した。この階級を制したのは、井上康生いのうえこうせい日本代表監督（東京2020大会当時）以来5大会ぶりだった。今大会での金メダル獲得により、ウルフ選手は史上



トランポリン女子の決勝で演技する宇山選手 © 青山純二/アフロスポーツ

8人目となるオリンピック、世界選手権、全日本選手権の3冠を達成した。また、今大会から新種目として採用された柔道混合団体にも出場した。混合団体は、男女それぞれ3人ずつの6人制で行われ、同じ階級同士で戦い、先に4勝した国が勝者となる。日本は決勝でフランスに敗れたものの、銀メダルを獲得した。

トランポリン——うやまめぐ宇山芽紅選手

印西市出身の宇山芽紅選手がトランポリン女子に出場し、日本女子で過去最高の成績となる5位入賞を果たした。宇山選手は、小学4年生でトランポリンを始め、ジュニア世代から日本代表として国際舞台に出場しており、2021年6月まで行われていたワールドカップ6大会の合計成績からオリンピック初出場を決めた。現在は、佐倉市を拠点とするスポーツクラブでトランポリンのコーチを務めている。



ボクシング女子フライ級で銅メダルを獲得した並木選手 © 西田尚己/アフロスポーツ



3000m障害で先頭争いをする三浦選手

© YUTAKA / アフロスポーツ



人馬一体となり障害を越える福島選手 © ロイター/アフロ

ボクシング——^{なみきつきみ}並木月海選手

ボクシングでは、女子フライ級に成田市出身の並木月海選手が出場した。ボクシング女子は、ロンドン大会からオリンピック正式種目として採用されていたが、日本は今大会が初出場となった。並木選手は、1、2回戦で圧勝し、準々決勝では2016年のリオデジャネイロ大会銅メダリストのイングリット・バレンシア選手（コロンビア）にポイントで勝利。準決勝でブルガリアの選手に敗れたが、見事に銅メダルを獲得した。並木選手は、幼いころから空手やキックボクシングに取り組み、中学2年生でボクシングを始め、オリンピック初出場でのメダル獲得を成し遂げた。

陸上競技——^{みうらりゅうじ}三浦龍司選手

陸上競技男子3000m障害には、印西市を拠点に活動する順天堂大学陸上競技部の三浦龍司選手が出場した。三浦選手は、3000m障害の予選で自身が持つ記録を更新する日本新記録で走り、全体2位で

決勝に進出。日本人として1972年のミュンヘン大会以来49年ぶりに臨んだ決勝では、一時は先頭に立つなど積極的なレースを展開し、同種目日本人初となる7位入賞を果たした。三浦選手は2021年6月に行われた日本選手権のレース終盤で転倒しながらも日本新記録で初優勝し、初のオリンピック代表入りを果たした。

馬術——^{ふくしまだいすけ}福島大輔選手

馬術の障害飛越決勝では、佐倉市出身で、千葉市立千城台南中学校、敬愛学園高校の卒業生でもある福島大輔選手が優勝決定戦である「ジャンプオフ」を経て6位に入賞した。オリンピックで実施される馬術には、総合、馬場、障害の3種類があり、福島選手が出場した障害馬術では、さまざまな障害物を規定時間内に次々と飛び越え、障害物の落下や障害物を避けるなどの減点が少ない馬が上位となる。福島選手は10歳で父が経営する佐倉ライディングクラブで乗馬と競走馬の育成を始め、高校1年生から



金メダルを獲得した野球日本代表 前列左から2番目が近藤選手

Photo by Tokyo 2020 / Ken Ishii

3年生まで国民体育大会を3連覇した。高校2年生のときには全日本大障害選手権の全種目（予選2種目、決勝）を完全優勝し、同選手権の優勝最年少記録（17歳）を保持している。

ゴルフ——^{いなみもね}稲見萌寧選手

ゴルフ女子最終日は、台風10号接近の影響を受けて、予定より1時間早い午前6時30分にプレーが開始された。この日、首位から5打差の3位タイでスタートした稲見萌寧選手は、2位タイでホールアウト。リディア・コー選手（ニュージーランド）とのプレーオフを制して、日本ゴルフ界初のメダル



ゴルフ女子で銀メダルを獲得した稲見選手

©青山紘二/アフロスポーツ

となる銀メダルを獲得した。

四街道市在住の稲見選手は、小学4年生でゴルフを始め、当時から千葉市内のゴルフクラブを練習拠点としている。2016年にナショナルチーム入りし、2019年にはツアー初優勝、2020～2021年シーズンの国内ツアーではオリンピック開催までに6勝しており、今大会が初めてのオリンピック出場となった。

野球——^{こんどうけんすけ}近藤健介選手

3大会ぶりに正式競技として復活した野球の日本代表には、千葉市出身の近藤健介選手が外野手として選出された。

代表チームは、出場する6カ国を2グループに分けて行ったオープニングラウンド（予選リーグ）で、ドミニカ共和国、メキシコと対戦し、両国に勝利。決勝トーナメントでは、初戦でアメリカ、準決勝で韓国、決勝で再度対戦したアメリカに勝利し、予選リーグから全勝で、オリンピックの正式競技となつてからは初の金メダル^{▶1}を獲得した。

▶1 公開競技（オリンピックにおいて試験的に実施する競技。正式競技とは区別される）として行われた1984年のロサンゼルス大会で、金メダルを獲得している。



アーティスティックスイミング日本代表のフリールーティン © AP / アフロの演技 右から4番目が塚本選手



空手の女子組手61kg超級予選で戦う植草選手 © 森田直樹 / アフロスポーツ

近藤選手は、捕手経験もある好打者で、ドミニカ共和国戦では9回に代打で安打を打ち、その後の逆転勝ちにつながった。また、準決勝の韓国戦ではスターティングメンバーとして出場し、日本の優勝に貢献した。

アーティスティックスイミング——塚本真由選手

大網白里市出身の塚本真由選手がアーティスティックスイミングの「チーム」に出場した。

今大会では、8人で演技する「チーム」と2人で演技する「デュエット」の種目があり、塚本選手が出場した「チーム」では、予選を実施せず、決まった8つの動きを取り入れるテクニカルルーティンと自由に演技するフリールーティンの合計点で競う。

日本は、テクニカルルーティンでは「空手」、フリールーティンでは「祭」をテーマに力強い演技を見せ、4位に入賞した。

塚本選手は、今大会で初のオリンピック出場を果たし、チームの演技では、高身長を生かしてジャンパーを下から高く飛ばす役割を務めるなど、勢いのあるリフトを担当した。



提供：共同通信社

銀メダルを獲得したバスケットボール女子代表
前列左から2番目が三好選手、3番目が宮崎選手、後列左から2番目が宮澤選手、後列右から2番目が林選手、3番目が赤穂選手

空手——植草歩選手

今大会から正式競技となった空手の女子組手61kg超級には、八街市出身の植草歩選手が出場し、7位に入賞した。

組手は、「突き」「打ち」「蹴り」を繰り返して、技に応じたポイントによって勝敗が決まる。

植草選手は、スピードのある「突き」を持ち味としており、これまでに2016年の世界選手権で優勝、体重無差別の全日本選手権では女子初となる4連覇を果たすなど、多くの大会で活躍してきた。

バスケットボール——三好南穂選手、林咲希選手、宮崎早織選手、宮澤夕貴選手、赤穂ひまわり選手

バスケットボール女子日本代表には、市川市出身の三好南穂選手、柏市をホームタウンとして活動するバスケットボールチームに所属している林咲希選手と宮崎早織選手、昭和学院高校（市川市）の卒業生である赤穂ひまわり選手が選出された。同じく日本代表に選出された宮澤夕貴選手は、2021年5月まで、林選手、宮崎選手と同じチームに所属しており、県ゆかりの選手が5人代表入りを果たした。

予選リーグ初戦で、世界ランキング10位の日本は同5位のフランスに勝利。同1位のアメリカには



レスリング女子50kg級の表彰式で金メダルを手にする須崎選手 ©エンリコ/アフロスポーツ



レスリング女子76kg級3位決定戦に臨む皆川選手 ©エンリコ/アフロスポーツ

敗れたが、2勝1敗で決勝トーナメントに進んだ。準々決勝の対戦相手は、世界ランキング6位のベルギーで、一時は大差をつけられたが、最終第4クォーターの残り約15秒で、林選手が3ポイントシュートを決めて劇的な勝利を飾った。準決勝では、フランスとの対戦で再び勝利。決勝では大会7連覇を目指すアメリカに敗れたが、男女通じてオリンピック初となる歴史的な銀メダル獲得を果たした。三好選手、宮澤選手は、2大会連続のオリンピック出場、林選手、宮崎選手、赤穂選手は今大会がオリンピック初出場となった。

レスリング女子50kg級——須崎優衣選手

今大会がオリンピック初出場となる須崎優衣選手（松戸市出身）は、女子50kg級に出場。全試合で対戦相手に圧勝し、金メダルを獲得した。開会式では、八村塁選手とともに日本選手団の旗手を務めた。

須崎選手は、小学1年生から父親がコーチを務めるクラブでレスリングを始め、高校3年生で出場した2017年の世界選手権では、2002年の伊調馨選手以来となる高校生での世界チャンピオンとなった。



サーフィン男子第3ラウンドでターンを決める大原選手 提供：共同通信社

2019年世界選手権の出場をかけた試合に敗れ、一時は今大会への出場が絶望的になったものの、2021年4月のアジア予選で代表の座を勝ち取った。

レスリング女子76kg級——皆川博恵選手

レスリング女子の最重量級である76kg級に松戸市在住の皆川博恵選手が出場。表彰台には届かなかったものの、5位入賞となった。

皆川選手は、この階級では小柄な選手だが、動き回って正面や横から相手を崩してタックルポイントを重ねるスタイルを武器にしている。

膝のけがでリオデジャネイロ大会への出場を逃した後、一時は引退することも考えたが、2017年、2018年の世界選手権で銅メダル、2019年には銀メダルを獲得し、オリンピック出場権を獲得した。

サーフィン——大原洋人選手

今大会から正式競技となったサーフィン男子には、競技会場となった釣ヶ崎海岸がある一宮町出身の大原洋人選手が出場した。第3ラウンドでは終了間際に逆転。準々決勝では金メダルを獲得したブラジルの選手に敗れたものの、5位入賞を果たした。

大原選手は、8歳のころに父親の影響でサーフィンを始め、釣ヶ崎海岸で初めて波に乗った。18歳で出場したUSオープンでは、サーフィンの本場アメリカで、日本人として初優勝。また、2021年の世界選手権で4位に入り、今大会の代表入りを決めた。



interview

レスリング女子50kg級決勝で戦う須崎選手
©エンリコ/アフロスポーツ

レスリング 須崎優衣選手

諦めなければ夢はかなう

——東京2020大会を振り返り、須崎選手にとって、どのような大会でしたか。

須崎選手 東京でのオリンピック開催が決まっただけで「東京オリンピックに出場して金メダルを獲得する！」と思いつけてきた夢の舞台であり、特別な大会でした。また、レスリング競技は地元の千葉県で実施されました。地元開催でのオリンピックで金メダルを獲得できたことで、私にとってさらに特別な大会になりました。

——開会式では日本選手団の旗手も務められました。どのような気持ちで大会に臨まれましたか。

須崎選手 初めお話をいただいたときは、私がそんな大役をやらせていただいて良いのかと心配にもなりましたが、せっかく選んでいただけたのだから自分にできることを全うしよう！という気持ち

で臨みました。また、日本選手団が良いスタートを切れるよう旗手として元気良く力強く行進しようと思いました。

——レスリングを始めたきっかけやオリンピックを目指そうと思ったきっかけを教えてください。

須崎選手 父がレスリングをやっていたということもあって、テレビでレスリングの試合を見ていて面白そう、私もやってみたい！と思うようになり、松戸ジュニアレスリングクラブに連れて行ってもらいました。

子どものころからレスリングが大好きで、水泳やピアノなども習っていましたが、習い事の中で一番レスリングが楽しかったです。小学5年生のころに、ナショナルトレーニングセンター（NTC）で行われるエリート合宿に参加しました。エリー

ト合宿には全国大会で優勝した選手だけが参加でき、NTCを訪れたときに充実した施設に衝撃を受け、そこから、オリンピックで金メダルを取れる選手になりたい！というのが私の夢になりました。

——左肘の靭帯断裂という大けがをされていますが、どのように乗り越えられましたか。

須崎選手 大けがは初めての経験でした。天皇杯前ということで大事なオリンピック選考会が始まる時期だったので、けがをした瞬間はもう東京オリンピックへ間に合わないのではないかと思います。大けがをして苦しい日々が続きましたが、周りの方々のたくさんの励ましや支えのおかげではい上がることができました。絶対に東京オリンピックに出場して金メダルを獲得して支えてくれた方々に恩返ししたいと改めて強く思い、それも自分の中の大きな原動力となりました。

——日ごろの練習や生活で、心がけていることはありますか。

須崎選手 「挑戦」という言葉を私は大切にしています。

——レスリングの魅力や難しさについて教えてください。

須崎選手 レスリングの魅力はお互い駆け引きの中で技を掛け合い、攻防をしていくことだと思います。また、気持ちが全面的にプレースタイルに表れるので、そういったところもレスリングの魅力だと思います。相手がいる競技なので、その中で自分が練習してきたことや自分の強みを出し切ることが難しいですが、そこが楽しさでもあります。——今後の目標をお願いします。

須崎選手 次の目標は、パリオリンピックに出場して、絶対に金メダルを獲得し、オリンピック二



コーチと監督の手を取って喜びを表す須崎選手（中央）

©エンリコ/アフロスポーツ



日本選手団の入場行進で旗手として国旗を持つ須崎選手

Photo by Tokyo 2020 / Shugo Takemi

連覇を果たすことです。そのためにこれから出場する全日本選手権、世界選手権で絶対に優勝したいと思っています。一つひとつ自分が掲げた目標を達成していき、最大の目標を達成できるよう頑張ります。

——最後に、未来のアスリート、子どもたちへメッセージをお願いします。

須崎選手 私は15年間レスリングをやってきて今大会でようやく夢をかなえることができました。夢をかなえて学んだことは二つあります。

一つ目は夢を言葉にすることです。私はずっと「東京オリンピックに出場して金メダルを獲得することが私の夢です」と宣言していました。そうすることによって、自分の言葉で言ったからには絶対にはかなえるぞ！という思いにつながり、自分自身を奮い立たせることができました。また、夢を言葉にすることで周りの方々も自然と応援してくれるようになり、私の大きな力になってくれました。けがや敗戦で、苦しかったときもありましたが、そのたびに周りの方々が励まし、応援してくれたおかげで今の私があります。

二つ目は絶対に諦めないことです。私は一度、世界選手権の出場をかけたプレーオフで負け、オリンピック出場の可能性が絶望的になりましたが、東京オリンピックで金メダルという夢を諦めたくないと思い、すぐに練習を再開しました。そうした中で、再びチャンスが巡ってきて国内予選においてプレーオフで負けた相手にリベンジし、オリンピックの代表権を獲得することができました。東京オリンピックは私にとって「諦めなければ夢はかなう」ということを体感させてくれる大会になりました。



interview

サーフィン男子で5位入賞した大原選手

© AP / アフロ

サーフィン おおはらひろと 大原洋人選手

目標を見失ったときは、 初心に戻る

——大原選手にとってのサーフィンの魅力を教えてください。

大原選手 自然相手のスポーツなので、同じ波は二度と来ません。波のコンディションは毎日違います。ボードに立って、進んでいく感覚が毎日新鮮で、毎日違った練習ができたから続けられたのだと思います。いつ何が起きるか分からないことにわくわくする気持ちがサーフィンの良さであり、魅力です。

——サーフィンの難しさはどのようなところですか。

大原選手 波のコンディションがいつも違うことです。試合までの課題は明確なのに、練習になる波が来ない日が続く。そんなとき上達することの

難しさを感じます。これは当然のことなので克服していくしかない。他には、試合中に自分で波を探すこと。試合会場によって異なるので、その時々への対応が問われます。

——これまでどのような困難にぶつかり、それを乗り越えるためにどうされましたか。

大原選手 15歳のとき世界戦の直前に病気になりました。出られなくなった試合で同世代の日本選手が活躍する姿を見て、自分だけ置いていかれているような感覚に陥ったのですが、カリフォルニアに拠点を移し、有望な選手の登竜門である大会に参加してから、サーフィン人生が一変しました。この大会は1年間に10戦あるのですが、海外での試合を重ねることでアウェー感がなくなっ

て自信を持てるようになり、他の日本人選手との差も巻き返すことができました。

——地元である釣ヶ崎海岸で、オリンピック史上初となるサーフィン競技が開催されましたが、どのような心境で大会に臨まれましたか。

大原選手 代表になれなかった日本人サーファーの分まで頑張ろうと思いました。

——未来の子どもたちにとって、釣ヶ崎海岸はどのような海であってほしいと思いますか。

大原選手 環境問題として話題になっていることはいくつもありますが、何も手をつけずにいると、10年後、20年後に海に来る人が減ってしまうという危機感に加え、サーフィンができなくなることも危惧されます。具体的に解決するのは難しいのですが、最低限、現状を維持していきたい。自分の言動も含めて、未来の子どもたちのために海を大切にする姿勢を持ち続けたいと思っています。——オリンピックの開催をきっかけに、サーフィンの競技人口が増えていくことが期待されています。サーフィンの普及に向けて、大原選手がこれまで関わってきたことやこれから取り組みたいことを教えてください。

大原選手 サーフィンを始める子どもたちのために、サーフィンもメジャースポーツになってほしいと思っています。サーフィンで豊かな生活を送ってほしい。他のプロスポーツ選手と同じようになりたい。自分としてはできる限り結果を残して、サーフィン界の理想の未来につなげていきたい。同じような考えを持っているサーファーは多いので、サーフィンの明るい未来のために取り組んでいきたいと思っています。



インタビューに答える大原選手



サーフボードの手入れをする大原選手

——3年後のパリ大会に向けて目標をお聞かせください。また、その目標に向けて取り組んでいきたいことや特に強化したいことがあれば教えてください。

大原選手 目標は、何色でも良いので、メダルを取ることです。2023年の世界戦(エルサルバドル)が最終選考の場になるのですが、それまでに世界のトップサーファーと同じ舞台上、1回でも多く挑むことで、自分の道が見えてくると思っています。そうすることが強化につながり、メダルも見えてくると信じています。

——地元一宮町では、多くの小学生や中学生がサーフィンをしていて、朝や放課後には海に行きサーフィンを楽しむなど、サーフィンが生活の一部になっていると聞いています。未来のオリンピックに向けて、メッセージをお願いします。

大原選手 上達することだけにこだわらず、目標を見失ったときは初心に戻って心から楽しんでほしいし、続けてほしいです。周りの目を気にせず、課題や目標を見つけ、自分がやりたいようにやってほしい。何でも負けが続くと意欲が下がりますが、気持ちの切り替えを大切にしてほしいですね。乗りたい波、やりたい技、楽しめている自分、この繰り返しのサイクルが次につながると思います。何があっても本質を見失わず、前に進んでほしいと思っています。



interview

柔道男子100kg級で金メダルを決めた瞬間のウルフ選手

©ロイター/アフロ

柔道 ウルフアロン選手

失敗の中に 成功のかけらを見つけて

——柔道男子100kg級での金メダル、混合団体での銀メダル獲得、おめでとうございます。

ウルフ選手 ありがとうございます。高校の3年間は千葉県で柔道に打ち込みましたので、僕にとって千葉県は柔道の故郷です。千葉県からは毎年さまざまな支援をいただき、それを力に変えることができました。次の世界選手権、オリンピックに向けて頑張っていきます。

——東京2020大会が1年延期になった後、どのようにモチベーションを維持されましたか。

ウルフ選手 2019年の年末に右膝の半月板を損傷してしまいました。次の年がオリンピックだったので少し焦りもあったのですが、1年延期にな

ったことでパフォーマンスを上げるための期間が増えたとプラスに考えるようにしました。その結果、1年間しっかりと準備をすることができたので、僕にとってこの延期はマイナスではなかったと思っています。

——これまで何度もけがをされた経験がありますが、挫けそうになったとき、どのように自分を奮い立たせて成果にたどり着いてこられましたか。

ウルフ選手 けがとの向き合い方というのはすごく大事で、けがをすると気持ちが沈んでしまう選手も多いと思うのですが、けがをしたときにしかできないことが必ずあります。



準決勝で戦うウルフ選手（左）

© 築田純/アフロ



男子100kg級の表彰式

© L/アフロスポーツ

膝をけがしたのであれば上半身の強化。またそのリハビリの部分でも、快復して試合に復帰したとき、けがをしたときよりも強くなった自分で戻って来られるように。そういうことを考えながら日々リハビリやトレーニングをするようにしていました。

——ウルフ選手にとって、柔道の魅力はどのようなところにありますか。

ウルフ選手 みんなもちろん努力しているのですが、天性の才能というように、もともと持っているものありきの競技もある中で、柔道は、本当に考えれば考えるほど奥が深く、どんな選手でも、またセンスがなくても勝てる競技です。僕自身はそこが柔道の魅力だと思っています。僕よりも技が切れる選手はたくさんいますが、どうしたら勝てるかをすごく考えます。そういう選手に勝ったときにより達成感を感じます。

——東京2020大会で初めて団体が種目に入りました。出場されてみていかがでしたか。

ウルフ選手 団体戦で対戦した選手は100kg超級の選手でしたので、100kg級よりもひと回りもふた回りも大きく、力強いと感じました。一方、動きが遅いところもあったので、そこが隙だと思いました。

——団体での銀メダルというのは、皆さんで勝ち取った一つの成果ですね。

ウルフ選手 そうですね。優勝に越したことはなかったということにはなりますけど、日本選手全員で勝ち取った銀メダルなので、そこには大きな意味があると思います。やはりみな悔しい思いをしましたので、次のパリのオリンピックでは優勝できるように、これからの3年間、しっかりと準備をしていきたいと思っています。

——けがをしたり、何かにつまづいたりしたとき、挫けない強い心を持つにはどうすればよいか、改めて子どもたちにメッセージをお願いします。

ウルフ選手 子どもたちには本当にさまざまなことにチャレンジしてほしいと思います。その人に合うもの、合わないものというのは人それぞれたくさんあると思いますし、それを見つけるためにも、まずはさまざまなことにチャレンジしてほしいです。そうすると、やれることの幅も広がりますし、また自分に合ったものが見つかると思います。

また、挫折したり、けがをしたり、失敗したりすることはたくさんあると思いますし、僕自身もありました。失敗から目をそらさずに、その失敗から見つけられるもの、その失敗の中に成功のかけらが必ず何かあると思うので、それを見つけて、自分自身の目標に向かって頑張ってもらいたいなと思います。



銀メダルを獲得した体操男子団体

© AP / アフロ

interview

体操競技

かやかずま

萱和磨選手、

たにがわわたる

谷川航選手、

はしもとだい き

橋本大輝選手

夢中になって楽しむことを続けて

——団体銀メダル、橋本選手の個人総合と種目別鉄棒で金メダル、萱選手の種目別あん馬の銅メダル獲得、おめでとうございます。東京2020大会を振り返り、どのような大会でしたか。

萱選手 初めてのオリンピックでキャプテンになり、チームを引っ張らなければいけないという中で、メンバーのことを気かけながら試合に臨んでいたのが、結果を残しただけでなく成長することもできたと思います。団体では0.1点差の銀メダルでしたので、次回のパリ大会で金メダルを取るために、この悔しさを忘れずに頑張っていきたいと思います。

谷川選手 今回は銀メダルという結果で、やはり金メダルが欲しかったという思いが残っているの

で、この悔しさを忘れずに、パリ大会では絶対金メダルを取れるようにこれからも頑張ります。

橋本選手 団体では、チームのみんながオリンピック初出場で今大会に挑みました。金メダルを獲得できなかったのは悔しいですが、一人ひとりが自分の役割を果たして全18演技をつなぐことができたおかげで、銀メダルを手にすることができたと思っています。

また、個人総合と種目別鉄棒では、団体戦での悔しさから気持ちを切り替えて、金メダルを獲得することができ、あの舞台では演技をすることを通して自分の成長を感じることができました。3年後のパリ大会では今大会のうれしい結果と悔しい結果を受け入れて、また日本代表の一人として

体操競技を引っ張っていきたいと思います。

——団体戦では、萱選手の演技に入る前と演技に入った後の気持ちが伝わってくるような仕草に引き込まれていきました。どのような気持ちで演技に臨まれたのですか。

萱選手 団体決勝では出場全種目で僕がトップバッターだったので、失敗するわけにはいかない、やはり次の選手にバトンを渡さなければいけないという思いがありました。トップバッターには緊張感がありますし、独特な雰囲気もあるので、その雰囲気に飲まれないために自分だけの世界を作って演技をしました。

——谷川選手や橋本選手は萱選手の演技や仕草を見て、どのように感じましたか。

谷川選手 普段の国内の大会でも気合いが入っていて声が大きかったりするのですが、オリンピックでは本当に気合いが入っていて、気持ちが伝わってきたので、しっかりいい演技をして、受け取ったバトンをまたつなげようという思いで演技しました。

橋本選手 萱選手はすごく集中していて、他を寄せ付けなくらいの気迫を感じました。その気迫

をチームにつないでいくという思いが強く伝わってきて、僕らの気を引き締めてくれたと思います。

——お話を伺うとまさに団体戦という感じが伝わってきます。オリンピックに出場して感じたことはありますか。

橋本選手 僕はあの舞台で演技をすること自体に成長を感じられました。個人総合決勝の鉄棒では前の選手が次々と落下し、独特の緊張感があったのですが、もう集中するしかないと思って強さを出せたことが金メダルにつながったと思っています。また、個人総合と鉄棒の2種目で金メダルを取ることができたのは僕だけの力ではないので、本当にいろいろな人に感謝しています。金メダルを取ったことはもう過去なので、また新たな自分として挑戦していきたいと思っています。

谷川選手 跳馬の予選では失敗してしまいましたが、団体戦ではしっかり決めることができましたので、そこはよかったと思っています。一方で、種目別跳馬の決勝に進むことができなかったのも、一発で技を決める強さをもっと磨いていかないといけないと思いました。



萱選手

©丸山康平/アフロ



谷川選手

©ロイター/アフロ



橋本選手

©丸山康平/アフロ

——これまで千葉県で体操に取り組み続けてきて、千葉県の体操の環境についてはどのように思いますか。

萱選手 千葉県は生まれ育った県であり、成長したところなんです。僕が体操を始めたときはまだクラブが少なく、中学生のときに特設体操部を作ってもらい、総合体育大会に出場しました。そのため、今後、体操の競技人口が増えてほしいという思いやもっとサポートしてほしいという思いがありました。僕らが頑張ることによって体操の認知度が高まり、体操教室などが広がれば、子どもたちの夢につながると思います。

谷川選手 僕も千葉県で生まれ育ったので、千葉県には感謝の気持ちでいっぱいです。僕は幼稚園のクラブで体操を始めました。その幼稚園の体育館も新しくなり、市立船橋高校や順天堂大学の体育館も素晴らしい設備の体育館になっています。このような環境で練習させてもらってきたからこそ、体操選手の4人中3人が千葉県出身ということになったと思います。本当に恵まれた環境で育ってきて不自由なく練習できていて、とても感謝しています。

——千葉県で成長した選手が自国開催のオリンピックの舞台上で活躍されたことは、子どもたちの大きな励みになると思います。改めて子どもたちに

メッセージをお願いします。

萱選手 僕は2004年のアテネオリンピックを見て体操を始めましたが、ずっと楽しいことをやり続けてきたと思っています。つらいこともありました、楽しいとつらいことも乗り越えられます。スポーツ以外でも何でも、ワクワクするような、時間を忘れて夢中になってしまうことをやり続けていけばいいと思います。

谷川選手 同じことになりますが、みんな「楽しい」の延長でここまでやってきていると思います。楽しくないと続けていけないし、自分が夢中になれることを続けることが、その道を極めることにつながると思うので、自分が楽しいと思えることを選んで、それを周りがサポートできるという環境があれば、何でも極めていけると思います。

橋本選手 僕は兄の影響で嫌々体操を始めたのですが、やっているうちに楽しくなりました。僕は大学生ですが、体操を息抜きにしたり、他のスポーツを息抜きとして考えたりすることも必要なかなと思います。何かに行き詰まってもリフレッシュできるようにして、少しでもスポーツに触れられるように、なおかつそれをサポートできる人も増えて、また仲間と切磋琢磨していけば、スポーツに向き合える時間が増えるのではないかと考えています。



銀メダルを手に笑顔で喜ぶ体操男子団体 左から1番目が萱選手、2番目が谷川選手、右から1番目が橋本選手

©丸山康平/アフロ